

## 特集：ジェンダーと教育

いま改めて、ひろくジェンダー視点から教育を問い直す研究が求められている。そこで今回は、「ジェンダーと教育」を特集テーマとしたい。スコット（J. W. Scott）による「ジェンダーとは、肉体的差異に意味を付与する知」（スコット 1992、荻野美穂訳『ジェンダーと歴史学』平凡社）という定義からは、ジェンダーが知の形成と深く結びついていることとともに、教育研究がジェンダーを問うことの重要性が読み取れる。ジェンダーと教育をめぐる研究は、これまでもジェンダー化された社会化のプロセスやかくれたカリキュラム、異性愛主義とそれにもとづく家族規範が埋め込まれた学校知、そしてそれらの形成や変革の歴史など、横断的、多声的なひろがりをもって展開をしてきた。

日本教育学会第73、74、75回大会の特別課題研究ではスクール・セクハラ問題を連続して取り上げ問題提起がなされてきたが、学校など教育の場でのセクシャル・ハラスメントは深刻な問題となっている。教育研究は「ジェンダーを『つくる』教育と、『変革する』教育、という教育が担う二つの働き」に対して、どのようにアプローチすることができるのか、継続して問われているといえよう。

近年明らかになった女子の受験生に対する一部の医大入試での点数操作などの不利な扱いは、今日でも教育の場で温存されている性差別の問題を浮かび上がらせた。また、日常生活の中での、みえる／みえないカリキュラムに埋めこまれた、性別により割り振られる役割規範は、依然として子ども・若者たちの生き方を方向づけ、葛藤をうみだしている可能性もある。性の多様性を尊重する学校現場での取組も、未だ十分ではない。

女性活躍が謳われていることから、“もはや性別による不平等は解消した”とするポスト・フェミニズムの主張が表れる一方で、ジェンダーによる不平等を階級やエスニシティとの交差的な視点から明らかにするインターセクショナル리티の視点は、一枚岩ではとらえきれない、一層見えにくくなったジェンダー不平等を明らかにしている。また、ふりかえれば性教育批判やジェンダーフリー教育へのバックラッシュ、家庭教育への国家の介入など、ジェンダーと教育をめぐる問題群は教育と政治の緊張した関係が先鋭的に表れるアリーナでもあった。国際情勢の混乱のなかで女子教育が脅かされる状況は、女性への教育の保障が未だ不安定であることも示している。

そして新型コロナウイルスの感染拡大に伴う社会経済状況の悪化や社会生活の制約は、10代を含む若い女性の抱えてきた生きにくさを浮かび上がらせた。こうした状況のなかで教育研究は、ジェンダーに関わる研究蓄積から示し得る知見を有しているのではないだろうか。会員の皆さんからの積極的な投稿を期待したい。

### 〈テーマ例〉

- ・進路形成や進学における性差（「ジェンダー・トラック」）
- ・「女子の好成績、男子の低学力」の階層と学力分析からの検証
- ・カリキュラム・教科書とジェンダー
- ・性教育の国際比較
- ・開発教育とジェンダー
- ・幼児教育／幼児期の社会化とジェンダー
- ・女子教育・婦人教育の歴史から読み解く現代
- ・「男性らしさ／女性らしさ」の問い直し
- ・ジェンダーと成人学習（成人学習におけるジェンダー問題、ジェンダー問題に関する成人学習）
- ・働く母親の教育意識
- ・女性のライフコース研究

締切：2022年7月29日（金）必着

送付先：日本教育学会機関誌編集委員会

〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-15-2 クレアール神田102

\*投稿にあたっては、最新の「投稿要領」を参照のうえ、封筒の表に「特集：ジェンダーと教育」と朱書きすること。